
ユウタのポケモンストーリー スペシャルエピソード ヨーギラス

T O M

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ユウタのポケモンストーリー スペシャルエピソード ヨーギラス

【Nコード】

N5978I

【作者名】

TOM

【あらすじ】

ユウタの最初のパートナー、ヨーギラス。ユウタの手に渡るまでの、ちよつとシリアスな物語。

(前書き)

TOM

やっと出来た〜！

ユウタ

TOMさん、小説すっぱかして何やっているんですか？

TOM

お前のサナギラスがヨーギラスだった時の話を書いたんだよ。ちょっと頑張ったよ。

ユウタ

まあそれは良いとして、小説の方は大丈夫なんですか？

TOM

……ちょっとスランプ気味かも。

ユウタ

……とにかく、一週間以内に更新しないとリアルモンスターハウスですからね。

TOM

そ、そんな……。

シロガネ山、それは、高く険しい山の一つで、カントー地方とジ
ョウト地方の間にあり、山の中には貴重なポケモンも沢山いる。

この地はジョウトポケモンリーグが管理している。そして、許可
を得た一部の人がシロガネ山へ行くことが出来ない。シロガネ山
に棲息しているポケモンは縄張り意識が物凄く強く、そして凶暴な
ポケモンが多いからだ。

さて、そんなシロガネ山の入口でもあるチャンピオンロード入口
ゲートに、4人の男性がいた。

「しかしオーキド博士やナカマド博士は、大丈夫ですか？」

「なに、心配いりませんよ。それに、いざとなればシロガネ山に
もポケモンセンターがありますからね。」

「オーキド君、そんな甘い考えだと、ポケモンセンターにたどり着
く前にやられるぞ。」

「ま、まあ、それはそうですね（汗）。」

「でも、今回はガイドさんも来てくれることですし、アウトドア派
のオダマキ博士もいることですからね。」

「ウツギさん、そんなに頼らないで下さいよ。僕も色々と準備はし
ていますが、いつ何が起るか分かりませんからね。」

「ウム、ようは自分の命は自分で守れということだな。」
「ところでオダマキ博士、今回はどのような物を持ってきたのです
かな？」

「今回はですね、まずシロガネ山の地図。手に入れるのに苦労しま
したよ。そして、その地図を基に作った手作りの地図。危険な箇所
とかをあらかじめ調べておくと、危険な場所に足を踏み入れること

は少なくなりますからね。そして迷ったときのためのコンパスや双眼鏡。

そしてカメラにスケッチブックに色鉛筆。これらはポケモンの観察に使うんですよ。

それに、万が一山中の中で遭難したとき用の防寒服や非常食にカイロ。あと、万が一ポケモンに襲われたときのためのモンスターボール。これを投げて、その隙に逃げます。」

オダマキ博士が次々とバックの中に入っているものを取り出す。そんなオダマキ博士に苦笑しながら近づいてくる人物が一人。

「いやあ、凄い準備ですね。あつ、申し遅れました。本日、皆様をシロガネ山へご案内致します、カントー警察ポケモンリーグ署シロガネ山保護区係長のリュウと申します。本日はよろしくお願い致します。」

リュウが4人の博士に挨拶をする。ちなみにリュウはかなり若く、年齢はウツギ博士と同じくらいだろうか。

「皆様ポケモン博士の方々ばかりなので大丈夫だとは思いますが、シロガネ山のポケモンは凶暴で、縄張り意識が通常の道路や洞窟にいるポケモン達より高く、中には我々人間に襲い掛かってくるポケモンもいます。縄張りに侵入してきた者は誰であれ縄張りから追い出そうとしますし、そんなポケモン達に生半可な攻撃を与えたら、火に油を注ぐようなものです。万が一襲われたら、保護区とか何とかは関係なく、攻撃をして下さい。あとは、足場が普段の森以上に柔らかく、足を捕られやすいので、注意してください。」

それでは、山のほうへご案内します。」
「ちよ、ちよっと待ってください。」

オダマキ博士が、リュウを引き止める。

「すみません、荷物をバックに入れてあるので、ちょっと待っていてくださいな。で、次はこれを……いや、こっちなかな？」

その後、オダマキ博士の準備が出来るまで、10分以上を要した。

同じ頃、シロガネ山洞窟入口前。

「……………」

木の上から、様子を伺っている人物がいた。

「……………出てきたな。」

その男が、ボソツと言う。その時、男性二人が洞窟の中から出てきた。服の胸の部分には、金色に輝く警察のマーク。シロガネ山の内部をパトロールしていたジュンサーだ。パトロールは、いつもほぼ同じ時間に行われていて、これから3時間は、ジュンサーがくる心配はない。ここはポケモン保護区の中でも最高ランクに位置しているため、見物人は滅多に來ない。これでゆつくりと獲物を待つことが出来る。

ちなみに、この男の職はポケモンハンター。珍しいポケモンを見つけて生け捕りにしたりする、闇の職業だ。この男はポケモンハンターの中でもトップを争うほどの腕で、警察からは全国的に指名手配されている。

そして今回、この男が狙うのはバンギラス。剥製にしたいということ、今回はその場で殺してしまってもいい。岩タイプを持つポケモンは、死んだ後も1週間は肉体が腐らないからだ。まあ雨が降ったりすれば、話は別だが……。また、依頼主がシロガネ山近辺に住んでいることや、自家用ヘリを持っている事等から、今回はシロガネ山でバンギラスを殺し、剥製にする作業は依頼主の自宅ですることとなった。

さて、シロガネ山でジュンサーのパトロールのパターンを調べ終わり、バンギラスを待つこと早3日。水とカンパンのみでバンギラスが洞窟の中から出てくるのを静かに待っている。食料などは、とりあえず1週間分を用意しておいたが、なかなかバンギラスが洞窟の中から出てきてくれない。洞窟の中で殺ると、ヘリに吊すことが出来なくなってしまう。はっきり言って、チャンスは一度きり。そのチャンスが訪れるのは、1日先なのか、2日先なのか分からない。ただ、そのチャンスが来るまで、ジッと待っているだけだ。

そして、チャンスがやってきた。1時間程経った頃、ヨーギラスと共にやってくる。恐らく親子だろう。だが、親子だろうが何だろうが、任務には関係ない。男は銃を構える。

……もう少し、もう少しで作業がしやすい、少し開けた場所に……
……今だ！

ズドーン

「…………今、何か聞こえませんでしたか？」

突然、オダマキ博士が皆に聞く。しかし、他の博士達は聞こえなかったようだ。一人を除いて。

「やはり聞こえましたか？」

「はい、鉄砲のような音でしたね。洞窟の方かな？」

「鉄砲…………、洞窟…………。」

リュウの顔が、どんどん青ざめていく。

「み、皆さん、こっちです！急いで！」

「……………」

男は、何も言わずにバンギラスに近寄る。バンギラスは倒れてい

るものの、まだ息はあるようだ。しかし心臓の部分に当たったはずなので、直に死ぬだろう。

「ヨ、ヨ……」

面倒なのは、いきなり倒れたバンギラスに驚いているヨーギラスだ。しきりにバンギラスの身体を揺さぶっている。はっきり言うてうざりたい。

「……消える。」

男が、ヨーギラスに向かって言う。しかし、ヨーギラスは男のいうことを無視してバンギラスの身体を揺さぶり続ける。

「……消えろって言ってんだよ！」

ズドーン

「ま、まただ。」

「今のは聞こえましたね。」

博士達とリュウは、シロガネ山の洞窟に向かっていた。

「しかしリュウさん、そんなに慌てて、どうしたのですか？」

「もしかしたら、ハンターかもしれないですよ。最近洞窟入口付近で、強烈な視線を感じたという者が何人か出てきていますのでね。」

「なるほど。しかし、ポケモンの視線とか、そういう物じゃないのですかな？」

「オーキドさん、シロガネ山のポケモン達は、そんなに縄張りを変えないんです。しかも、縄張り自体が結構広め。だから、一定の場所です突然強い視線を、しかも一定の場所で浴びるのは、おかしいことなんですよ。」

「オダマキ博士の言う通りです。それより、もうすぐ洞窟です。」

「ちっ、余計な事しやがって。」

男がヨーギラスに向かって弾を打った時、バンギラスがヨーギラスを庇った。弾はバンギラスの腕に命中し、さらに出血が酷くなる。

「……………」

男は再び銃を構えるが、またバンギラスがヨーギラスを庇ってしまふ恐れがある。そうになると、商品をさらに傷つけてしまうことと

なる。それだけは避けなければならない。

「……………」

男は銃をヨーギラスから逸らす。そして、ヨーギラスに向かっておもいつきり銃を振りかぶる。

バシッ

「ヨ〜〜」

「フン、どけてって言うてんのに、どかないおまえが悪いんだ、よ！」

バシッ

「ヨ〜〜」

銃が当たったヨーギラスの頭部から、どんどん出血してくる。しかし男はそんなことはお構い無しに、男は銃を何回もヨーギラスに当て続ける。

「おい、何をしている！」

突然後ろから声がして、男は手を止めて後ろを振り返る。

「……………お前、ポケモンハンターのシンだな。」

「……………警察か。……………それと、有名な博士達。見られてもらっちゃあしょうがないな。マタドガス、出てこい。」

「ドガー」

「ウインディ、行ってこい！」

「ウー！」

「フン、マタドガス、煙幕だ。」

「ドガー！」

マタドガスが、次々と煙幕を吐き出し続ける。視界は、煙幕で完全に塞がれてしまった。

ダンドンダンドン

「ウツ……」

シンが数発銃を乱射し、どこからかリュウのうめき声が聞こえる。

「くっ、ピジョット、風起こし。」

「ムクホーク、霧払いだ。」

ウツギ博士とナナカマド博士がそれぞれ鳥ポケモンを出し、煙幕を払う。煙幕の向こうでは、マタドガスはリュウのウインディに倒されていて、その奥では左肩から血を流しているリュウが、シンと組み合っていた。しかし肩を負傷しているリュウは、シンに押され気味だ。

「うわっ。」

リュウが足を滑らして倒れる。シンは倒れたリュウに銃口を向けた。

「……まずはお前……」

シンが言葉を切つて、素早く左側に移動する。そしてシンがいた場所から、不意打ちしようとしたウツギ博士が飛び込んできた。ウツギ博士はまさか避けられるとはおもっておらず、リュウの横に倒れ込む。

シンは狙いをリュウからウツギ博士に変え、容赦なく引き金を引いた。

「……………た、弾が……………」

シンが呆然とする。まさかの事態が起きた。銃の弾が無くなったのだ。換えの弾は、バンギラスを待っている時にいた木の上。今更取りに行くことも出来ない。

「……………クソー！」

シンが吠え、リュウとウツギ博士に向かって、銃を竹刀のように振りかぶる。

バシッ

「……………クッ」
「……………」

シンが振り下ろした銃を、リュウが右手だけで受け止めた。その後、どちらとも一歩も譲らない。

「よいしょっ。」

「うわっ！」

突然、ウツギ博士がシンの足を引っ掛ける。リュウに集中していたシンは、バランスを崩してしまう。

リュウはこの一瞬を逃さず、シンから銃を奪い、倒れ込むシンの腹部目掛けて銃を突き刺した。

「ウツ」

シンは腹部を押さえながら地面にうずくまる。そんなシンに、リュウが手錠を持ちながら近づく。

「……ポケモンハンティング行為、……及び……銃刀法違反……現行犯で……逮捕する！」

カチャンという乾いた音と共に、シンの腕に銀色の手錠がかかった。シンの武器は銃だけ。その銃をリュウに取られてしまったのだから、シンは抵抗することはなかった。

「逮捕出来ましたか。ではオーキド君、次はリュウ君の応急処置だ。」

「わかりました。」

ナナカマド博士とオーキド博士は、リュウとウツギ博士博士がシンと戦っている間、ずっとヨーギラスとバンギラスの手当をしていたのだ。

「あとオダマキ君、君は急いでポケモンセンターへこの2匹を持って行ってくれ。」

「えっ、はっ、はっ、はい。」

未だに動揺しているオダマキ博士。ちなみにシンの逮捕にも、ヨーギラスとバンギラスの手当てにも参加せずに動揺しっぱなしだったのは、オダマキ博士だけだった。オダマキ博士はナナカマド博士からモンスターボールを受け取り、何度も転びながらポケモンセンターへ向かった。

「……………で、どうしますかな？」

先日シロガネ山に登った4人の博士が、小さな部屋で話し合っている。真ん中には、ヨーギラスが入ったモンスターボールが一つ。

結局、バンギラスはポケモンセンターに運び込まれたときには、既に息を引き取っていた。残されたヨーギラスは、まだ子供。シロガネ山に返るのが一番良いのかもしれないが、子供一匹を自然に放すのはどうかということ、博士一人がヨーギラスを引き取る事となった。

で、現在誰が引き取るのかを相談している。しかし皆、
「自分は引き取りたくない。」

というオーラを出している。親を亡くした子供なのだから、心になり深い傷を負っているはず。自分の研究も精一杯なのに、さらに仕事を増やすことになる。普通なら専門機関へ預けるところだが、ポケモンが貴重なだけに、下手に預ける事も出来ない。

「……………私が預かるう。」

行動を最初に起こしたのは、ナナカマド博士だった。

「ナ、ナナカマド博士、大丈夫ですか？」

「ウム、親を失った子供ポケモンの面倒は何度か見たことがあるし、それにこのヨーギラスは私が捕まえた。私がこのヨーギラスの面倒を見る筋は通っていると思うが？」

「……………では、ヨーギラスはナナカマド博士に任せるということで、宜しいですか？」

一同がコクリと頷く。ナナカマド博士はヨーギラスのモンスターボールに手を延ばした。

「それじゃナナカマド博士、失礼します。」

「ウム、気をつけてな。」

ナナカマドポケモン研究所から、一人の少年が飛び出す。いつもと変わらない日常。ただ一つを除いて。

ナナカマド博士は、そのまま一つの部屋に入る。そこには、助手のコウジとヨーギラスがいた。

「コウジ君、ヨーギラスはどんな感じかね？」

「ダメですね。聴力が低下していて、時々僕の指示も聞かないくらいですからね。」

「……なら今度、子供達のパートナーにするのは、無理だな。」

「ちよつと難しいかもしれませんがね。」

ナナカマド博士が残念そうに言うと、コウジが返す。研究所にはポケモンも沢山いるし、研究所にいるポケモンと友達となれば、母親を殺された悲しみも和らぐだろう。また、新しい場所にも慣れるはずだ。そう思っていた。

しかし現実はそのほど甘くはなかった。シンに殴られたことが聴力に影響し、他のポケモンとのコミュニケーションも上手くいかず、仲間外れ状態。これが影響したのか、いつしかヨーギラスはふさぎ込んでしまった。

また、ちよつと新人トレーナーデビューの時期でもあったため、いざとなれば新人トレーナーに面倒を見てもらおうとも思っていたが、聴力低下が著しく、バトル等には大きなハンディとなる。

「まあ、心が通じ合えば大丈夫だと思いますけどね。」

「そんな事、子供に出来ると思っっているのか？」

「ユウタとか、あとケイ君とかはやってくれそうですね。」

「……………とにかく、このヨーギラスは我々だけで育てる。子供には絶対に無理だ。コウジ君、絶対にユウタ君やケイ君に、ヨーギラスの事を言うんじゃないぞ。興味を持たれたら困るからな。」

「……………分かりました。」

その後、なぜかユウタのパートナー選びの時にヨーギラスが混ざってしまい、ユウタはヨーギラスをパートナーに選んだ。

「……歳を取ったな。」

ユウタが旅立った後、ナナカマド博士はポツリと言った。子供には無理だと思っていたのに、ヨーギラスはユウタが側にいただけで笑顔になった。毎日のように会っていたのにも関わらず、ユウタの中にある力に気づかなかった。若い頃は、パツと見ただけで相手の何かを感じていたのにも関わらず、何年もつき合ってきた人から何も感じなかったとは。そんなナナカマド博士の頭の中に、先日コウジが言った一言が頭を過ぎる。

「ユウタとか、あとケイ君とかはやってくれそうですけどね。」

もしかしたら、コウジはユウタの秘めた力に気づいていたのかも
しれない。

「そろそろ、引退かな……。」

秋の夕焼けを見ながら、一人静かにナナカマド博士は考えていた。

(後書き)

さて、後書きは久々にTOMだけです。

いつかは書きたいなと思っていた、ヨーギラス時代のストーリー、楽しんでいただけたでしょうか？

最初、難聴のヨーギラスがパートナーということ、どうしようかなと思いました。けど、今回のストーリーが頭の中に浮かんだ瞬間、今回のストーリーの骨組みは出来ました。そして、今回の人気投票のキャラ票トップということで、今回この話を執筆しました。今度の人気投票でまたサナギラス(今回はバンギラスに進化している?)がトップになっちゃったら、どうしようかな？

シンとリュウは今後は出す予定はありません。このストーリーだけのキャラといった感じです。あと、ナナカマド博士はまだすぐに引退はしません。とりあえず、ユウタのポケモンストーリーが完結するまでは引退しません。最後はどうしようかなと思って、僕の指の思うままに書いていたら、こんな文章になってしまいました。

あと今回、名前だけですが、義成先生のケイを使わせていただきました。ありがとうございました。

さて、次は誰のスペシャルストーリーになるのか、それは僕にも分かりませんが、次回もお楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5978i/>

ユウタのポケモンストーリー スペシャルエピソード ヨーギラス

2010年10月9日20時42分発行